

「熱帯高地」の比較研究 —ヒマラヤ・チベットとアンデスにおける高度差利用

稲村哲也

愛知県立大学

本稿は、高度差利用と農耕牧畜の移動の問題に焦点を当て、低緯度山岳地域である中部ヒマラヤ及びチベットと中央アンデスを比較したものである。両地域の10度以上の緯度の違いが、とりわけ牧畜の形態に大きな影響を与える。ヒマラヤのヤク・ゾムの牧畜では移牧が行なわれており、アンデスの牧畜は定牧（定住的牧畜）である。両地域の農牧複合、専業牧畜、チベットにおける多様な形態を総合すると、「遊牧」「移牧」「定牧」「定牧移農」「移牧移農」「移牧定農」「定牧定農」という論理的に可能なすべてのタイプが出揃うことになる。

はじめに

低緯度の山岳地域は、その麓に熱帯ないし亜熱帯の気候をもち、標高が高くなるにつれて気温が下がりやがて氷雪地域に至る。そのため、地球上のほとんどの気候帯が凝縮されたような多様な自然環境をもっている。アンデスやヒマラヤでは、人々はその多様な環境に適応し、標高差を巧みに利用して生活してきた。

低緯度の山岳地域は、人類史においても重要な位置を占めてきた。アンデスでは、ジャガイモなどのイモ類をはじめとする多様な作物が栽培化され、ラクダ科動物のリヤマとアルパカが家畜化された。近年、海岸地方で発掘が進んでいる紀元前3000年に遡るカラル遺跡、アスペロ遺跡などでは、海の幸を中心としながら、山岳地域との交流を示す遺物が出土している。つまり、非常に古い時代から、海岸地方でも豊富な海の幸と初期農耕による多彩なアンデス文明が展開し、山と海岸の交流が重要な意味をもった。ヒマラヤ・チベット高地では、独自に栽培した植物は少ないが、ヤクなどの家畜を導入し、オオムギやソバを中心とする農耕を基盤とした独自の文明が築かれた。また、エチオピア高地でもテフ、エンセテなどの作物が栽培化され、独自の犁耕を伴う文明が起った。

山岳地域の環境は、その多様性が人の生活に有利な条件をもたらしたが、一方で、傾斜地が多く、土壌の浸食による地力低下、自然災害などの脆弱さを併せもっている。山岳地域における高度な文明は、マイナス面を階段畑などの技術で補い、多

様な植物栽培や灌漑技術などによって、プラス面を最大限に利用することで成立した。

山岳地域は交通の便の悪さから近代化から取り残された地域も多く、伝統的な生活が比較的維持されてきた。そのため、今日でも、多様な自然環境を巧みに利用した生活と文化がみられ、生態人類学的な研究の格好のフィールドとなってきた。一方で、近年になって急速な近代化、観光化などによる変化の波にさらされ、急激な環境悪化と、様々な環境問題が生じている地域も少なくない。

環境と人間のかかわりを問題にするとき、以上にあげたような理由から、低緯度山岳地域をとりあげることの重要性は明白であろう。これまでも、山岳地域を対象とした文化人類学的研究は多く行われてきたが、その多くは個別の対象、個別の関心によるものであった。それらの研究蓄積を活かすためにも、低緯度山岳地域における環境と人の問題に関して、その共通性と個別的特質を明らかにするための、文理融合型の総合的な比較研究の展開が強く望まれる時期に来ている。

筆者は1978年9月から1980年12月にかけて、ペルー南西部のアンデス高原（標高4,500メートル前後）で、リヤマとアルパカを飼養するケチュアの牧民社会を中心に調査を行い、それ以後も数度の現地調査を行った。一方、野外民族博物館リトルワールドにシェルパの仏教（ラマ教）寺院を復元するため、1984年1月にネパール・ヒマラヤのソルクンプ地方を訪れて以来、何度かシェルパ社会の調査を行ってきた。特に、1989年度、

1994～1996年度は科研費により、ソル地域ジュンベシ谷において現地調査を行なった。また1999年には科研費により、チベットでも農耕と牧畜に焦点をあてた現地調査を行なった。

本稿では、それらの現地調査の資料を中心に、また、比較材料として文献資料も用いて、中部ヒマラヤ及びチベットと中央アンデスにおける高度差利用と移動に焦点を当てて比較したい。なお、記述は現在形で行なうが、すべて調査時現在とする。取り上げるのは、アンデスではバレーのケチュア族の社会で、中央アンデスの東斜面（山本紀夫が現地調査を行なった）、中央アンデスの西部高地（筆者が調査を行なった）、そしてヒマラヤでは、ネパールのクンプ地域の「高地シェルパ」（鹿野勝彦らが調査を行なった）、そこより標高の低いソル地域のシェルパとグルン（山本や筆者らが共同調査を行なった）、またチベットの広域調査の資料である。アンデスの二つの地域は高地の湿潤な東と乾燥した西の両端であり、自然環境と地形によって生業形態が異なり、比較の意味がある。また、ヒマラヤ高地の二地域は共通性がありながら、移動の形態が異なり、やはり比較の意味がある。本稿ではそれにチベットを比べることで、山岳地域の高度差利用の形態をほぼ網羅できると思われる。

筆者はこれまでも何度か両地域を比較する論稿を発表してきたが、本稿では、異分野間の共同研究を意識し、民族誌的データはできるだけ簡潔に記述するとともに、これまでの論を若干修正したい。

「熱帯高地」の比較研究 ヒマラヤとアンデスの比較研究

文化人類学における山岳地域比較研究の嚆矢は1973年アメリカ人類学協会の年次大会で、アンデス、ヒマラヤ、アルプスにおける文化的適応を比較したシンポジウム「山地のエコシステムへの文化的適応」の開催であった。その後、アンデスとヒマラヤを比較する研究がいくつか発表された。そうした流れを受けて、日本では、1981年から3年間、国立民族学博物館で共同研究「アンデス・ヒマラヤ・アルプス—高度差利用の比較研究—」が実施された。この共同研究会の参加者で2地域以上の研究を実施している者はなく、比較

研究の重要性が確認されるとともに、その遅れが明らかになった。

その後、アンデスにおける民族植物学的研究を蓄積してきた山本紀夫と、アンデスにおける牧民社会研究を行ってきた筆者は、ネパールで研究をしていた結城史隆とともに、1990年、科研費による「ネパール・ヒマラヤにおける環境利用の民族学的研究—中央アンデスとの比較」を実施し、さらに、1994年から3年間、科研費による「ネパール・ヒマラヤにおける草地・森林利用の動態に関する民族学的研究」（課題番号06041126、代表者山本紀夫）によって、植物生態学、畜産学（草地学）、自然地理学、気象学、環境社会学などの分野を含めた学際的な共同研究を実施した。この科研の研究メンバーを中心として、山本紀夫は1995年から3年間、国立民族学博物館の共同研究「ヒマラヤにおける環境利用の民族学研究」を組織し、1995年第5回日本熱帯生態学会で公開シンポジウム「熱帯高地の人と暮らし—ヒマラヤとアンデス—」が開催された。このシンポジウムの成果をもとに、1996年3月に『熱帯研究』第5巻第3/4号に、特集「熱帯高地における人と暮らし」が組まれた。これが、日本における「熱帯高地」に関する最初の総合的な比較研究の成果と言えるものであろう。その特集で、山本紀夫・岩田修二・重田真義が「熱帯高地とは一人間の生活領域としての視点から—」において、「熱帯高地」に関する地理学的・生態学的な概念設定、文化人類学的な比較研究の基本的な課題、今後の展望について論じている¹⁾。なお、ネパールで実施した科研による現地調査の成果は『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパ社会』²⁾として刊行された。

中央アンデスと中部ヒマラヤの環境

本論に入る前に、両地域の自然環境について比較しておきたい。両地域は低緯度の高地という共通点をもつが、違いも大きい。まず地理的な位置をみると、アンデスは南北に長く伸び、ヒマラヤはほぼ東西に走る山脈である。アンデスの長さは南北約8000キロメートルにおよび、北緯12度あたりから南緯56度まで伸びている。一方、ヒマラヤは東西に2200キロメートル伸び、やや南に膨んでいる。両山脈の高さについては、ヒマラヤが多数の8000メートル峰を擁するのに、アンデス

では最高峰でも 6000 メートル台である。

ヒマラヤとその北につながるチベット高原（ヒマラヤ・チベット山塊）は、インド亜大陸がユーラシア大陸に衝突して沈みこんで形成された。アンデス山脈も太平洋の海洋プレートが南米大陸の下に沈み込むことによって形成された。しかし、両者を比較すると、インド亜大陸とユーラシア大陸の衝突のインパクトの方が大きかったため、ヒマラヤ・チベット山塊はアンデスよりもより大きく高い。また、ヒマラヤは地形が厳しく、傾斜も急で、平坦地がほとんどない。ヒマラヤの地形は南北に並行した数列の丘陵と山脈のからなり、また、造山活動による隆起と河川による浸食のせめぎあいの結果として深い渓谷が形成されているからである。一方、中央アンデスでは、東西を走る山脈の間に広い高原が広がっている。

両地域の緯度の違いが気象条件の違いをもたらしている。ヒマラヤのなかで南に張り出している中部ヒマラヤでも、緯度の上では中央アンデスより 10 度以上も高緯度に位置している。それが両地域における気候に重要な違いを生み出している。アンデス高地では、気温の日変化は大きいのが年変化がほとんどない。一方、ヒマラヤ高地では、気温の年変化がかなり大きい。そのような気候の違いは、とりわけ牧畜の形態に大きな影響を与えている。

ネパール・ヒマラヤーシェルパ社会における農耕・牧畜と高度差利用

ソル地方シェルパ族の社会と生業

サガルマタ（エベレスト）南域に位置するソルクンプ地方はシェルパ族の主要な居住地域であり、北部の標高の高いクンプ地域と南部の比較的低いソル地域とに大きく分かれている。サガルマタをはじめとする主要山群はクンプに属し、そこは登山やトレッキングの主要ルートとなっており、近年のトレッキング・ブームのため急激な社会変化を蒙っている。一方、ソルは、トレッキングの中心地からは外れているため、クンプと比べると伝統的な環境利用システムが維持されている。また、ソルはクンプより古くからシェルパ族が居住しているといわれ、特にジュンベシ村（標高約 2700 メートル）はシェルパ族の最も古い村とされている。山本紀夫を団長とした共同研究グ

ループは、このジュンベシ村から北にのびる谷（ジュンベシ＝バサ谷）で調査を行った。

ソル地域はいくつかの行政単位に分かれているが、ジュンベシ＝バサ谷はベニ行政区に属している。ベニ行政区全体では 23 ほどの集落があり、約 260 戸が居住している。その大多数はシェルパ族であるが、他にネワール族 16 戸、マガール族 12 戸、カミ（鍛冶屋を営むヒンドゥー下位カースト集団）6 戸など若干の他民族も住んでいる。調査地のジュンベシとその上流では、3 戸のカミを除くと地元住民はすべてシェルパ族である。シェルパ族はルーと呼ばれる父系クランに分かれている。基本的にひとつの村落はひとつのクランからなる（クラン成員が地域的にかたまつた localized clan を成している）のがソル地域の特徴である（一方、クンプ地域では同一村落に複数のクランが混在している）。クランは外婚の単位である（同一クラン集団内での婚姻が禁じられる）ため、ジュンベシなどの単一クラン村落では妻を他村から迎える。婚姻後の居住は、妻方に 3 年ほど住んだあと夫方の村に移って定着する「妻方＝夫方居住」である。年長の子供から順に独立していき末息子が両親の家に残るため、家族の形態は一般に直系家族（stem family）または核家族となる。

ジュンベシ＝バサ谷のシェルパ族の村々の位置は、最も上流のパンカルマ村でも標高は約 2900 メートルで、あとで述べるクンプ地域などの「高地シェルパ」と比べると標高が低い。耕地はほぼ標高 3000 メートルあたりまでに限られている。そこでは、春先に播種し秋に収穫するトウモロコシ、秋に播種し初夏に収穫するオオムギ、冬に植え付けし夏に収穫するジャガイモなどが栽培されている。このように、1 年を通じて耕作が可能であり、クンプと比べると農耕の条件には比較的恵まれている。しかし、作物の種類は、ジャガイモ、トウモロコシ、オオムギなどに限られている。米や野菜などは、シェルパより低地に住む他の諸民族が栽培するものを定期市で手に入れている。ソル地域の多くの世帯は、ウシを舎飼いし、近くの森での日帰り放牧を行っている。ウシは乳を得るほか、木の葉などと混ぜて堆肥を作るため、農民にとって重要な家畜である。

また、農耕を営みながら、ヤク（雌はナクと呼

ばれる）またはヤクとウシを交配させた種間一代雑種のゾムの群を飼養する世帯もある。ゾムの雄（ゾプキョ）は駄獣として利用される。ゾムはヤクより乳量が多いという利点があり、またヤクより低い高度に適している。雄のゾプキョには繁殖能力がないが、雌のゾムは繁殖能力を有する。ゾム飼養の目的は出産後の搾乳である。乳は木製の筒のなかで攪拌してバターを作り、それを町の市場で売る。なお、ゾムの子の第二代雑種は、乳量が少ないなど価値がないため、出産後は放置され死んでしまうことが多い。

ソル地域で飼養されているゾムには2種類ある。ナク（雌ヤク）に種ウシをかけたものをディムズといい、雌ウシに種ヤクをかけたものをウランという。ディムズとウランとでは、ウランの方がより低い高度に適している。ジュンベシ＝バサ谷ではほとんどがディムズである。

一方、ヤク飼養者は、搾乳は行うものの、ナク（雌ヤク）に種ウシをかけあわせることでディムズ（ゾム）を生産することを主目的としている。ナクに対してまず種ウシとの交配が試みられ、それがうまくいかない場合に種ヤクと交配させ、ヤク群を再生産する。異種間交配がうまくいって生まれたディムズは高く売れるが、ナクは4分の1ほどの価格で、雄ヤクはほとんど価値がない。

ヤク群とゾム群は移動範囲（標高）と移動時期が異なるため、両者が一緒に群として飼養されることはなく、家畜飼養はどちらかに専門化している。例えば、パンカルマ村の13世帯のうち8世帯が牧畜にも従事し、そのうちの6世帯がヤク、2世帯がディムズ（ゾム）を飼養している。また、ジュンベシ村（付随したナムチェ集落を含む）の住民30世帯のうちの8世帯が牧畜も行っており、夏にはバサ谷の源頭部にあるラマ・クランの放牧地チャルンカに集合する。彼らのうち3世帯がヤク、3世帯がディムズ（ゾム）を飼養している。のこり2世帯のうち1世帯はゾプキョ（ディムズの雄）の仔家畜を飼い、1年育てた後に売却している。他の1世帯は主にディムズの仔家畜を飼っている。仔家畜の飼養は短期的投資が可能なビジネス的要素をもった特殊な牧畜形態である。

谷はクランの土地に細かく区分されており、それぞれの区画は原則としてクラン成員しか利用できない。他のクラン成員やグルン族が許可を得て

利用する場合は、クランの長に年間1500ルピーを支払う。こうしたクランの土地は、谷の源頭部から村落周辺まで点在しており、それらの土地には牧地の性質や形状にちなんだ名前がついている。ヤクやゾムの飼養者たちは、谷沿いに点在するクランの土地で放牧しながら、谷の高度差を利用し、季節的な上下移動、すなわち移牧を行っている。

ヤクとゾムの移牧のサイクルは、冬のあいだ集落の近くの森まで下ろし、春から徐々に谷の上流に移動させ、夏には標高4000メートル以上の夏営地で放牧させ、秋に再び下流に移動させるという移動である。バサ谷を利用するラマ・クランの場合、ヤク群を飼養する世帯は、標高3150メートルと4300メートルのあいだを上下している。標高約4000メートル以上の夏営地には7月初めころから2カ月半ほど滞在し、最も低い冬営地には12月から5カ月ほど滞在する。

ディムズ群を飼養する世帯の場合、冬は12月から約5カ月間、ジュンベシ周辺あるいはそれよりさらに低い森の中で過ごす。ヤク群と比べると冬営地は500メートルほど低い。また、7月ころ夏営地のチャルンカでヤク群と合流するが、そこでの滞在期間は1カ月余と短い。

かれらは、家畜飼養のため村を離れ森のなかにはいると、そこでは木組み構造に竹のマットで葺いた仮小屋に住む。一方、高原部にはかなりしっかりした石積みの小屋が建てられている。石積みの小屋には2種類あり、板葺きのタイプと、持ち運ぶ竹マットで屋根を葺くタイプがある。夏の放牧地であるチャルンカでは、10棟ほどの石積みの小屋が小集落を成している。そこには「ラサ」と呼ばれる儀礼・集会小屋もあり、7月下旬から8月上旬に牧者たちによって夏の祭「ヤルジャン」がとりおこなわれる。

「高地シェルパ」の生業^{3,4)}

鹿野勝彦によれば、「高地シェルパ」と呼ぶのは標高3000メートル以上に生活の本拠としての村をもつグループである。具体的にはドッド・コシ源頭のクンプ、及びタンバ・コシの一支流であるロールワリンの両地域のシェルパをさす。彼らは、ジャガイモ、オオムギ、コムギ、トウモロコシなどを主作物とする農業と、ヤク及びゾムの牧

畜、チベットとインド平原を結ぶ交易、それに近年の交易の衰退にともなう盛んになった出稼ぎなどを営んできた。「高地シェルパ」の住む地域は急峻で、ソル地域と比べて耕地として利用できる土地が限られ、より寒冷的な気候のため、農業に関する自然条件には恵まれていない。したがって、農業以外の生業への依存度が比較的高く、クンプのナムチェなどいくつかの村では、ロッジ・商店経営などのトレッキング・観光ビジネス等が重要である。

「高地シェルパ」の村は一般に標高約 3400 メートルから 4000 メートルまでの間に位置している。そして各々の村の人々が農業や牧畜のために日常的に利用する土地は、この村を含むひとつないしいくつかの特定の谷の流域の一定範囲には限定されている。鹿野はこれを「生活圏」と名付けている。「高地シェルパ」は、こうした生活圏の内部で家畜の移牧を行ってきた。ソルと比較すると、次のようないくつかの異なる特徴がある。

- ①一般に、ソルにみられるような単一クラン村はなく、クランによる放牧地の占有やコントロールもない。
- ②家畜飼養は雄ヤク（ナク）群が中心であり、その目的はゾプキョとゾムの生産とその売却であった。乳利用は本来副次的な意味しかもっていない。
- ③各世帯は標高差が異なる 3～4 軒またはそれ以上の家をもって、それらが小集落をなし、その上限は 5,000 メートル付近まで達する。標高 4,300 メートルの農耕限界をこえる集落以外は、その周辺に耕地を伴っている。
- ④少なくとも年 2 回の上下移動のサイクルによる家畜のトランスヒューマンズがおこなわれている。それは、春から秋にかけての自然の飼料のみに依存する時期と、晩秋から早春にかけてのある程度貯蔵飼料に依存する時期に分けられる。

彼らは、③の標高の異なる集落と耕地をもっており、④のような家畜の季節移動をするとともに、農耕のためにも、頻繁に上下移動を繰り返す。耕地を異なる高さに分散させることによって、労働力の時期的な分散による生産性の増加と、危険の

分散の意味をもっている。

④で指摘され年 2 回の上下移動のうちの春から秋にかけての移動サイクルは、夏に高地へ上がり、秋に低地へ下がるという自然の周期に一致したものである。この時期、畑では併行して耕作が開始され、6 月下旬から 7 月上旬にかけて行われるドゥムジェの祭りのあとは、家畜は畑の上限より上へ移動することが義務づけられる。さらに、この移動では、家畜の移動とは別に、植え付け、草とり、収穫という農耕のための移動も繰り返される。それに対し、もう 1 回の晩秋から早春（冬季）の間に再び高地に上がるという移動は、降雪などのため干草にも頼らざるをえないこの時期に、秋に刈り集めた干草の倉庫を兼ねた高地集落の家に順次上げていくからである。また、この時期の移動は、分散している畑への施肥をも目的としている。

グルン族羊飼いの移牧

チャルンカには、ジュンベシの数 10 キロ南の低地に位置するオカルドゥンガ地方のルムジェタルというところ（標高約 1300 メートル）から、4 グループのグルン族の羊飼いたちもやってくる。かれらは約一カ月ラマ・クランの夏の放牧地チャルンカ周辺で過ごしたあと、谷を下り、秋にはジュンベシの収穫あとの畑に仮小屋をたてて約一カ月を過ごす。そこでは、周辺の森で日帰り放牧を繰り返し、夜は畑にヒツジを集める。そこでヒツジが糞を落とすことによって、シェルパ族の農民に肥料を提供する。仮小屋とヒツジの寝場所は毎日移動させ、畑にまんべんなく糞が落ちるようにする。そして、畑の所有者から食料としてツァンパ（大麦の粉を煎ったシェルパの伝統的な主食で、バター茶をかけて食べることが多い）をもらう。かれらはジュンベシに滞在したあとは、パプルからドゥドゥ・コシ川に沿って下っていき、地元のオカルドゥンガ地方を通過し、10 月のヒンドゥーの祭「ダサイン」の前にはインド国境に近いウダイプール地方まで南下し、そこで犠牲に供するためのヒツジを売る。そして、春には再びジュンベシ谷に向かって北上する。

このように、ジュンベシ＝バサ谷では、シェルパ族によるヤクとゾムの移牧に、グルン族のヒツジの移牧が重なっており、そこに二つの民族間の互恵的関係が見られる。夏の祭り「ヤルジャン」

も二つの民族のメンバーが共同して行う。

チベットにおける環境利用 ヤルン・ザンボ川流域の農村

ここでは、1999年9月にチベット高原で実施した広域調査に基づいて、チベットにおける生業の概要を述べる。広域調査はラサから北に谷沿いに遡上し那曲（ナクチュ）地区安多（アムド）県へと、チベット自治区の境に至るルート、そして、ラサからヤルン・ザンボ河沿いに西に遡上し、日喀則（シガツェ）を経て、南進し定日（ティンリ）からヒマラヤを越え、ネパールに下るルートであった。

ラサ近郊の農村では、ハダカムギ、コムギが中心に作られている。1970年代末に人民公社が解体し、次いで1980年代になって農業請負制が実施され、1人当たり4畝（1畝は15分の1ヘクタール）ほどの農地が配分された。農業請負制となつてからは、商品価値の高いアブラナ、ジャガイモ、ダイコンなども多く作られるようになった。シガツェ近郊の農村ではソバも栽培されている。ラサ近郊ではビニール・ハウスも目立っている。家畜はウシ、ゾー（ウシとヤクの雑種、ゾムと同じ）を主とし、他に若干のヒツジ、ヤギ、ウマなどがある。ウシは乳用と肉用で、ゾーが耕作に使われている。

このような農村の一例であるラサの東約20キロに位置する堆龍徳慶（ドゥーロンディチン）県サンモ行政村（標高約3600メートル）では、一組から五組に分かれ、各組が集落をなしている。サンモ全体の戸数は約300戸、人口は1350人である。サンモ行政村はかつての人民公社にあたり、各組が生産隊にあたる。サンモ村二組（56戸）の場合、家畜の数は、ウシ290頭、ゾー80頭、ヒツジ50頭、ヤギ少数、ウマ3頭である。夏の間、ゾーは高地の遊牧民に預けて飼ってもらい、その謝礼として、ゾー1頭当たり28斤のハダカムギを支払っている。旧暦9月頃になると、高地からゾーを下ろし耕起に使用する。

西部のシガツェ（標高3900メートル）近郊の農村曲下郷一村（30戸）ではゾーは飼養されず、ウシが耕起用としても使われている。家畜頭数はウシ（耕起用のオス、乳用のメスの合計で）約300頭、ヒツジ・ヤギが約1000頭である。村か

ら離れた場所に日帰り放牧できる共同の草地がある。そのため、農業中心の村ではあるが、かなりの数のヒツジ・ヤギも飼養されている。

半農半牧（農牧複合）の村々

谷の標高が高くなるにつれ、農村でも家畜飼養の重要性が高まる。そうした村々の多くは、村の共同の放牧地を持ち、耕作用のゾーやヤク（チベットでは「ヤー」と呼ばれる）の飼養も年間を通して村のメンバーによって行われ、その飼養を牧民に頼ることはない。

ラサ地区北部の堆龍徳慶（ドゥーロンディチン）県馬（マー）郷セシュ村（標高3850メートル）は、戸数約70戸の村である。セシュ村が以前属していた馬公社は6村（6生産隊）で構成されていた。人民公社解体後、耕地は1人当たり4畝が配分されたが、高地部の放牧地は分配されずに共同で使われている。主作物はオオムギ（チンコムギ）で、コムギは少ない。他にエンドウマメ、アブラナ、ジャガイモとダイコンが栽培されている。セシュ村の家畜頭数は、ヤク40頭（すべてオス）、ゾー400頭（メスは約10頭位で、ほとんどがオス）、ウシ600頭（乳用の雌が約100頭、肉用の雄が約500頭）、ヒツジ600頭、ヤギ400頭である。ヤクとゾーについては、そのうち約70頭が耕起用であるが、他は肉用で、それは自家消費するだけでなく、おもに祭りのときに市場で売る。ゾモ（ゾーの雌）のうち搾乳するのは村全体で約10頭にすぎない。つまり、ゾーの主たる飼養目的は搾乳ではなく、耕作用である。それはヒマラヤ南面のシェルパの場合とは対称的である。ヤクとゾーは夏（6－9月）には山の方の高地部で放牧する。村の全てのヤク、ゾーを集めて、数人で放牧するが、1戸当たりで、3－4日が分担期間となる。10月－6月までは村に下ろして、耕起に使い、その後、刈り跡の畑などで放牧する。ヤクはゴンギー村（同県だが、歩いて5－6時間）の牧民から買い、ゾーは村で生産している。すなわち、種ヤクを買い、村のウシに種付けをして交配させている。

ヤルン・ザンボ河を遡る西部の谷では、かなりの高地でも農耕を行っている。標高4400メートルに位置するニラム県満布（メンブ）郷の二村ではオオムギを中心に、他にマメ、アブラナを栽培

している。ジャガイモも栽培するが、時々うまく育つ程度だという。収穫時期を迎えたオオムギ以外にまだ緑色のオオムギが目についたが、それは播種時期を遅らせたもので、干し草にしてゾーの飼料にするものである。ここでは、満布郷の前身である満布人民公社が解体された後、1人当たり6畝の耕地が配分された。満布（メンブ）郷の普仁（プリ）村（戸数約40戸）で飼われているおもな家畜の頭数はゾー60頭、ウシ90頭、ヒツジ・ヤギ6000頭、ウマ30頭である。ここでは全家族がゾーを所有し、ゾーだけを耕起に使用している。ゾーは夏期（旧暦3月から6月）には山の上の共有の放牧地で放牧する。村の全てのゾーを集めて共同放牧地に2人が赴くが、その為に1家族当たり3元をその2人に支払っているという。

西木（シムー）村は普仁（プリ）村に隣接する村であるが、ここで飼われているおもな家畜の頭数は、ヤク80頭、ウシ40頭、ヒツジ4000頭、ウマ20頭である。ここでは、ゾーは全く飼われておらず、ヤクのみが耕起に利用されている。隣村のゾーがこの村ではそっくりヤクに入れ替わっているのである。ヤクを使う理由は、（ゾーの方が大きく力があるが）「こちらの村の土地の方が軟らかいため、ヤクで耕起が容易にでき、ゾーを飼うためには草が多く必要であるため」とのことであった

谷上流－源頭部の專業牧畜村

牧畜を專業とする人々は、U字谷上流－源頭部、及び高原部に居住している。その生態系のやや異なる二つの地域では、家畜の飼養形態及び居住形態が異なっている。ここではまず、U字谷上流－源頭部について述べる。

ラサの北方の當雄（ダンシュン）市の近くの、當雄県ギャルゲン行政村（當雄の北約10キロメートル、標高4270メートル）などがこのタイプである。そこでは、小規模の移牧が行われている。このタイプの特徴は、谷の支流基部などにアドベ造りの家屋が建ち並ぶ定住集落をもち、支流源頭部の高地に夏の放牧地を持つのが典型のようである。支流源頭部の高地までは、ほぼ1日で行ける距離にある。6－7月（旧暦）には夏の放牧地にテントを張り、各戸毎に放牧する。同県拉陀（ラドゥ）郷ナルズィ村の場合は、1戸当たり1、2

名で2家族が一緒になって放牧している。夏以外の時期は、集落に比較的近い谷部で放牧し、夜は定住家屋に付随した家畜囲いに家畜を集める。そこではふつうはテントを張らないことが多いが、ギャルゲン行政村5組では、放牧の便をよくするために、定住家屋の周辺にテントを張っていた。定住集落の近くには針金で囲った冬用の草場もあり、その草は刈って干し草にし、冬の飼料とする。また、母家畜または仔家畜がその中で採食している事例も見られた。人民公社解体後に家畜は私有化され、1戸当たり20から70頭程度のヤクが飼養されている。人民公社は現在の郷に対応している場合が多い。郷は一般に10以下の村（ないし組）で構成されている。放牧地は、公社解体後、村（ないし組）単位で共同利用されている場合が多い。たとえば、當雄県尼珠（ニンドゥ）郷一組（約40戸）では、家族毎に配分はされたが、共同で利用しているという。

高原部の專業牧畜地区

標高の高い高原部の例として、那曲県措瑪（ツォマ）郷は15組が所属し、戸数688戸、人口3317人である。三つの公社が、その解体を機に一つの郷に統合されたものである。郷全体の家畜の頭数は、ヤク16500頭、ヒツジ8348頭、ヤギ9899頭、ウマ1310頭である。一組に郷の中心があり、そこには学校や郷政府と、山の上のゴンバ（寺）があり、その山のふもとに尼僧のゴンバがあり、約20人の僧、約40人の尼僧がいる。

人民公社は1968年に始まり1978年に解体した。解体後に家畜を分配し私有化した。家畜の配分は組によって異なった。1985年に草地請負制により、草地が各戸毎にその居住地に近い放牧地が配分されたが、数戸が共同で草地を占有している場合もある。また、組によっては全体を共同で占有しているところもある。

一組（36戸）の場合、人民公社の時には1戸当たりヤク100頭、ヒツジ100頭くらいを請け負って飼育した。組（生産隊）全体で、ヤク、ヒツジそれぞれ数千頭程度だった。現在、家畜は私有化され、放牧地も配分されたが、郷長の場合、隣同士の4家族が共同で放牧地を占有し利用している。湖の岸から東西およそ10キロ、南北に見渡せる山までが占有領域である。通常はその範囲で

日帰り放牧を行い、秋冬の草が悪い時には遠くに放牧するため、テントを使用することもある。移動の範囲は公社の時とあまり変わらないという。テントによる移動放牧の時期は前項の谷上流－源頭部の牧畜村の場合のように一定していない。調査時期にテントで放牧をする牧民にも出会ったが、秋に移動放牧をし、距離は1日程度だという。一年中定住家屋からの日帰り放牧をし、テントは利用していない場合もあった。

この事例は、最低限の遊牧的移動を維持した、いわゆる「半遊牧」の形態といってよいだろう。

チベットにおける伝統的な生業形態

1949年以後チベットは中国の統治下にあり、すでにみてきたように、農村や牧民のコミュニティは、人民公社を経て現在は中国の行政区分の枠組に規定されている。人民公社は従来のコミュニティの枠組みをかなり踏襲したともいわれているが、家畜の移動範囲は以前と比べ非常に限定されている。高原部の専門牧畜のコミュニティでも、一年の大半はヤクの群は定住の居住地から日帰り放牧され、テントに住んで家畜を放牧するのは一年のうちの数ヶ月にすぎない。放牧範囲は1家族、数家族、1集落などの占有領域内に限定されているため、移動の距離も1日の範囲内である。チベット自治区における牧畜は、「農業請負制」によって家族毎に放牧地が配分された内蒙古自治区におけるモンゴル族遊牧民とはほぼ同じ状況にあるといえる⁵⁾。つまり、現在の「遊牧」は「半定住半遊牧」という呼び方がふさわしい。

それでは中国統治以前のチベットにおける牧畜はどのようなものだったであろうか。戦前の8年間にわたって北東部のチベット社会に住んだイクヴァルの報告⁶⁾によって、ある程度知ることができる。

イクヴァルは、チベットの遊牧について、高地環境であることに由来する上下の移動性をもつことを特徴とし、モンゴル、カザフ、キルギス、イラン、サハラなど乾燥地の遊牧との違いを強調している。チベットでは高度によって、農耕地域と牧畜地域が明確に区分されるが、農耕の上限は、高緯度の北緯38度では約2700メートル、低緯度の北緯27度では約4500メートルである。牧畜地域はその上から雪線（一年中雪に被われる地域の

下限）までであるが、北緯38度では3600メートルまで、北緯27度では5100メートルまでである。

ヤク遊牧民はふつう一年間に3回から8回の移動を行い、特別な場合には12回に及んだ。冬の放牧地は標高が低く比較的暖かい場所が選ばれた。春になると、草の生長に合わせるように、順次高いところに移動してゆき、夏には雪線に近い最も標高の高いところで放牧した。ヤク遊牧民の中には、土や干しレンガや畜糞で作ったり、掘った縦穴や洞窟を利用した冬の固定住居をもち、秋に草を刈り干し草を冬のために用意する人びともいた。一方、定住を遊牧民にとって卑しむべきことと考え、一年をとおしてテントで生活し干し草も作らない人びともいた。いずれの場合も冬は標高の低いところに下りた。そこは農村から比較的近い場所であるため、冬は農民との交流が盛んに行われた。とくに、遊牧民は草を「刈る」という農耕的な作業をあまり好まなかったため、固定の冬営地をもつ遊牧民は草刈りのために農民を雇うことが多かった。農民によっては現金収入と乳製品などを手に入れるいい機会となり、遊牧民と農民の間に親密な関係がつくられていたという。

以上のイクヴァルによる記述から、遊牧にも冬の定住家屋をもつ形態と一年を通してテントに住んで移動するものがあったことがわかる。移動の範囲は、遊牧形態と地域によって異なったと思われるが、大規模な移動をしていた遊牧民は農村に近いところから雪線までを移動していた。つまり、遊牧的な水平方向の移動に上下移動の要素を含んでいた。

イクヴァルの記述では、ゾーについては、その重要性は述べられているが、具体的な飼養の形態は明らかではない。おそらく、谷の上流部の半農半牧（農牧複合）のコミュニティではゾーが飼われていたはずであり、現在の形態と近い形での移動も行われていたことが推測される。

スタンはチベットにおける生活の様々な形態についてまとめている⁷⁾。スタンの記述を引用する形で、類型化してみよう。

スタンは、まず、①日帰り放牧を伴う農村「ある村は農業を主体としているが、近くに牧地を持っている。家畜は日中そこへ連れて行かれ、夜には家畜小屋に連れかえられる。そして冬にはずっと小屋に留まり、秋に刈りとられた株で養わ

れる。」について記述している。

次に、②農牧複合コミュニティ（移牧を伴う半農半牧村）について「そうかと思うと他の農家では、家畜は夏中を牧地で過ごし、これを守る番人はテントに寝起きし、冬になるまで戻らない。」と記述している。

次に、③農牧複合コミュニティ（同一集団が農民と遊牧を行う牧民とに分かれるタイプとして、「一種族が二つのグループに分かれていることも多い。一つは農民で、山あいの耕作地帯にいる。他の一つは純粋な遊牧者で高原の牧草地にいる。この二つの集団は同じ種族名をもち、同じ首領をいただいている。」とする。また、「往々にして、この両者はただ一つの村落共同体に属し、あるいはただ一つの家族集団に属する。」としている。

さらに、④専業遊牧の集団として、「アムドでは、これと違って、遊牧の集団がごく小さな牧草地帯とベース・キャンプ的な冬の地区とをもっている。この冬の地区には家があり、集団の構成員すべて－夏は分散している－がここに集結する。これらの家には家畜小屋があり、家畜小屋の近くには一家族ごとに燕麦の畑があって、青いうちにこれを刈り入れて株とする。」としている。夏は、分散して遊牧が行なわれるが、冬营地は家畜小屋を伴う固定的なキャンプで、栽培したエンバクを飼料として利用している。

スタンは「ほとんどの場所でも、農耕地帯と遊牧地帯は互いに非常に接近しており、農民と牧民の接触は緊密で恒常的である。というのも、彼らは当然その生産物を互いに交換しあうからである。」として、遊牧と農耕との緊密な関係を強調している。また、「往々にして、この両者はただ一つの村落共同体に属し、あるいはただ一つの家族集団に属する。」として、多くの場合に、遊牧と農耕が組み合わされた③の農牧複合のタイプであることを示唆している。

これをみると、筆者らが調査した現代のチベットの生業の事例は、遊牧の移動回数や範囲が限定されたことを除けば、チベットの伝統的な生活形態をかなり踏襲していると判断することができる。

中央アンデスのケチュア社会における環境利用

東斜面における高度差利用（農牧複合）

中央アンデスは南北にのびる2本のおもな山脈から成っている。アマゾンからの湿った大気が白い雪となってそれを覆う東側のシエラ・ブランカ（白山脈）と、西側の乾燥したシエラ・ネグラ（黒山脈）である。それらの山脈の間には、標高4000メートルの高さで緩やかに起伏する広い高原がひろがり、ペルー南部では、その幅は最大で300キロに達する。2本の山脈が白と黒と名づけられているように、アンデスといっても、東と西では自然環境はかなり異なる。

アンデスにおける環境利用といえば、まずは高度差の利用が重要であるが、大規模な高度差の利用という観点からいえば、山本紀夫が調査を行った中央アンデス東斜面のマカパタは最も顕著な地域のひとつである。

マカパタは、クスコの東方直線距離にして約100キロ、東の山脈を越えてアマゾン側に下るところに位置している。アンデス東斜面の標高2600から3500メートルあたりは雲霧林帯にあたる。陽当たりのよい北斜面（南半球であるため北半球とは逆）は階段耕地が広がっているが、南斜面ではコケヤランなどの着生植物に被われた樹木が繁茂している。マカパタの村の範囲は5000メートルから1000メートルまでにおよぶ。そこに約4000人が生活しているが、その多くはケチュア族のインディオ（先住民）で、彼らは様々な高さの生産ゾーンに耕地をもち、その高さに適した作物を栽培している。アンデスの環境区分帯でいうとプーナ、スニ、ケシュア、ユンガの四つを含んでおり、それが次に述べる四つのゾーン（放牧、ジャガイモ、トウモロコシ、熱帯低地）にほぼ一致している。

図1に示されているように、最も高い耕地はジャガイモ栽培ゾーンで、標高3000メートルから4300メートルあたりまで連続している。このゾーンだけでも1000メートル以上の標高差があるため、高さに応じて、上からルキ、プーナ、チャウビ・マワイ、マワイという4種類のジャガイモが栽培されている。これは大まかな分類（品種群）であり、ジャガイモはさらに色や形などによってマカパタだけでも約200の品種に分けられ、異

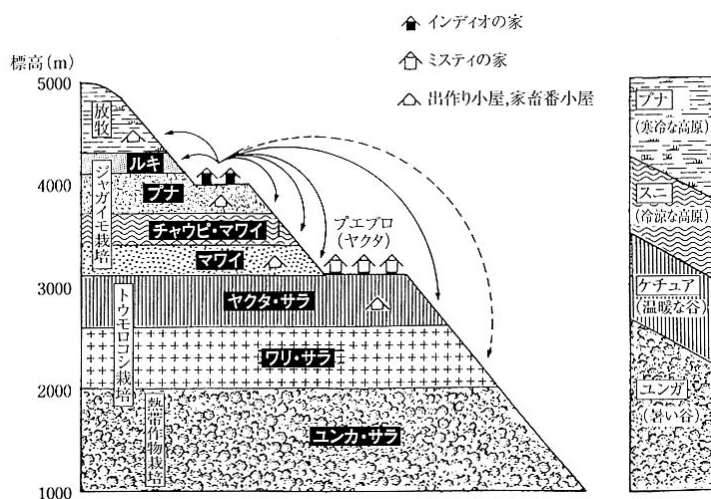


図1 マルカパタ垂直利用図³¹⁾

なる名称で呼ばれているという。このゾーンにはキヌアやカニワなどの雑穀やタルウイ（マメ類）も栽培される。もっとも高い耕地で栽培されるルキはそのままでは苦みがあって食べられないが、4月から9月頃までの乾季に強い日射と昼夜の寒暖の大きな変化を利用してチューニョと呼ばれる凍結乾燥ジャガイモに加工される。チューニョは乾燥して保存がきくようになり、水でもどしてスープなどに入れて食べる。

ジャガイモ栽培ゾーンの下がトウモロコシ栽培ゾーンである。トウモロコシ（ケチュア語で「サラ」と呼ばれる）も高さに応じて三つの異なる種類が栽培されている。このゾーンの下にはトウガラシなどの栽培に適した熱帯低地が続く。その地域には新しい入植者たちが居住しているが、インディオ住民の一部はそこにも耕地をもっている。

また、ジャガイモ栽培ゾーンの上限に近いところはプーナ、すなわち家畜の放牧地と重複している。このゾーンは標高4000メートルから上に広がる高原草地であり、そこでリヤマやアルパカ、それにヨーロッパからもちこまれたヒツジが放牧される。1家族あたりの平均的な家畜の数はリヤマ10数頭、アルパカ50頭、ヒツジ30頭ほどである。

インディオたちが常住する家屋は標高4000

メートルあたりの高原に位置している。ジャガイモやトウモロコシの播種や収穫のときには、標高差にして数百から千メートル以上下にある耕地に出向くわけだが、いちいち往復するのは大変なので、何か所かに出作り小屋が作られておりそこに何日間か滞在する。また、乾季には草がなくなるため、リヤマやアルパカを雪解け水のできる湿地帯で放牧する。そこは常住の住居より数百メートル高いので、家族の一部が家畜番小屋に滞在して放牧に従事する。ジャガイモやトウモロコシの収穫時には、人びとはリヤマを連れて耕地に下り、作物を入れた袋をリヤマの背に載せて高地の家まで運搬する。

このマルカパタの北に隣接するケロ谷について、ヌニェス・デル・ブラードとウェブスターが調査報告を出している^{8,9)}。ケロでも、プーナに位置する四つの氷食谷の源頭部に11の集落があり、そこにインディオたちの主たる居住地がある。この地域の周辺にはリヤマやアルパカの放牧に適した草場が広がっており、やや下ったところにルキの畑がある。四つの谷が下って合流するあたり（標高約3400メートル）には、ハトゥン（大）・ケロと呼ばれる中心の村がある。そこには、40戸ほどの石積みの住居と小さなカトリック礼拝会、それに近年になって建てられた学校があるが、

通常は人が住まない空き家の村である。ハトゥン・ケロの家は、祭、儀礼、集会、ジャガイモ収穫などの時にだけ使うのである。さらに、そこから約25キロ下ったプシュケロと呼ばれる熱帯地域に小屋をもっており、それらはトウモロコシ収穫などの時にだけ使われる。ハトゥン（大）・ケロとプシュケロの中間地帯は非常に険しい峡谷で耕地はほとんどない。プシュケロでは、トウモロコシを中心とし、他の熱帯性作物も耕作されている。プシュケロの木造の家屋も必要な時だけ使用するもので、簡単な生活道具があるだけで、食糧も貯蔵されていない。

マルカパタでは、標高3100メートルあたりにプエプロ（町）と呼ばれる場所があり、そこには教会や学校があり、主にミスティ（インディオと白人の混血）の家族100戸ほどが住んでいる。プエプロにはアマゾンへの入植地への道路が通っており、ミスティたちはあとからこの場所に入ってきた住民であり、もともとはケロのような居住パターンが原型だと考えられる。つまり、アンデス東斜面では、人びとは標高4000メートル以上のプーナ（高地）に定住し、そこから農作業の必要に応じて随時谷を下り、畑の近くの作り小屋に滞在するのである。谷の合流地点の集落は農作業のためだけでなく、コミュニティの社会的中心でもある。

プーナでは一年を通じてリヤマやアルパカを放牧する。マルカパタでは、プーナでルキ（ジャガイモ高地種）の栽培をおこなっており、農耕地域と牧畜地域が一部オーバーラップしている。マルカパタではまた、家畜の季節的移動がみられるが、それは規模としてはミクロな移動であり、冬期（乾季）により高い（より寒い）場所に移ることになり、ヒマラヤの移牧とは全く性格を異にするものである。収穫時にはリヤマを伴って谷を下り、農作物を高地の家に運搬するため、頻繁な家畜の上下移動をしているようにも見えるが、それは移牧ではない。リヤマとアルパカの牧畜はむしろ定住的であり、農耕が人びとのトランスヒューマンス（季節的上下移動）の要因となっているのである。

アンデスの牧畜の定住性については、筆者が調査を行ったアンデス高原西部の専門的牧畜をみるとより明確である。そこで次に、ブルー南西部高地のプイカにおける高度差利用の実態を紹介

したい。

西部高地のケチュア社会と高度差利用

東斜面と異なり、中央アンデス海岸地方（太平洋岸）はフンボルト海流（寒流）の影響で低気圧が発生しないため、一年中ほとんど雨が降らない。しかし、肥沃な海岸河谷にアンデス山地から注ぐ河の水が古くから灌漑されて農耕が営まれ、地域毎に特色ある古代文化を育んできた。海岸にはアンデス山脈が迫っており、海岸と山岳地域との交流が古くから行なわれてきた。しかし、海岸河谷を遡った西斜面の中流域は急峻でまた乾燥しており、不毛の地が多い。その点はアンデス東斜面とは異なっている。

筆者が調査をおこなったのはアレキパ県ラ・ウニオン郡プイカ行政村であるが、そこはアンデスの西部高原に位置し、太平洋に注ぐオコニャ川の源頭部にあたる。東斜面と比べると乾燥しているが、海岸地帯とは異なり、高原では、ある程度の雨量と雪解け水による湧水がある。

プイカは南北、東西がそれぞれ30数キロというかなり広い地域を含んでおり、その高さは標高3000メートルから5000メートル余に位置している。プイカ行政村の面積のほとんど（約97%）は標高4000メートルを超える高原である。高原は農耕限界を超えているが、なだらかな氷食谷（氷期に氷河の浸食によって形成された谷）を中心に豊かな草原を形成しており、リヤマやアルパカを飼養する牧民たち500余人が生活している。氷食谷は三つに分かれており、それらが合流する地点からさらに下流にくだってゆくと、やがて険しい峡谷となる。峡谷部は面積では数パーセントに過ぎないが、その比較的暖かい峡谷では、その斜面につくられた段々畑で、ジャガイモ、トウモロコシなどを耕作する農民たちが2000人余り生活している。そこには、中心の「プイカ」村を含めて七つの農耕村落がある。

ケチュア族の親族制度は双系であり、父系出自集団のような大きな親族集団を形成するわけではない。親族は自己を中心として父方母方を同等にたどるカテゴリーで、日本の「シンルイ」に似ている。農村では、家族は核家族が基本で、農地も基本的には均分相続であるため、高地は細分化される傾向にある。一方、牧民社会では、兄弟間で

の放牧地の細分化を避けるため、既婚の男兄弟が同居する大家族を形成する傾向がある。もっとも、ごく最近の傾向としては、放牧地もある程度分割される傾向にある。

現在のケチュア族の社会では、親族制度が双系であるため、血縁ではなく地縁的なコミュニティが形成されている。コミュニティの凝集力は、アイニ（相互扶助制度）や年に数回行なわれるカトリックの聖人信仰の祭りなどで培われる。プイカ行政区では、酒食の大盤振る舞いを伴うカルゴ（役職）の階梯制が維持されており、それが重要な役割を担っている。カルゴは、使い走りのものから聖行列を組織する上位のものまでがあり、祭りの機会に毎年交代する。個人の経歴としてみると、独身時に下位のカルゴを務め、結婚してから数年の間隔をあけて、より上位のカルゴを務めてゆく。カルゴは無報酬であり、祭りの大盤振る舞いなどでかなりの出費となる。こうした宗教的なカルゴとは別に政治権威的なカルゴもあり、双方のカルゴをほぼ交互に務めるに従って、社会的な威信が高まる。すべて務めると長老として敬われる。プイカにおけるカルゴのシステムは農民社会と牧畜社会で別々のシステムとなっており、それが全体的に統合されるという形態をとっている。また、プイカの祭りには、農民の守護聖人の祭り（農民がカルゴを担う）、牧民の守護聖人の祭り（牧民がカルゴを担う）、農民と牧民のカルゴを務める祭りとがある。したがって、プイカのカルゴ・システムは、富の消費によって社会的威信を獲得する一種の再分配システムであり、また行政区内の「農民」と「牧民」とを明確に区分しながら統合するという機能をもっている（詳しくは稲村¹⁰⁾）。

中央アンデス高地の生態学的環境は、このように標高により「高原」と「峡谷」に大きく二分され、それぞれに「牧畜」／「農耕」という二つの生業経済が対応している。プイカ行政区では、さらにそれに対応して「牧民の社会」と「農民の社会」が明確に区分されており、その両者が緊密な相互依存関係を保っている。

プイカの峡谷には伝統的な二つのタイプの耕地、すなわちライメ（Laime）とコムニダ（Comunidad）がある。ライメは、概ね標高 3600 メートルから 3900 メートルの間に位置し、作物と耕地のローテーションのシステムをもつ一種の共同管理の農

地である（ライメのシステムはマルカパタなど東斜面にも存在する）。集落ごとにライメがあり、それは通常六つか七つの部分に区分され、それらの間で輪作と休耕のローテーションが行われている。ライメの主作物はジャガイモで、休耕後の畑にまずジャガイモが栽培される。翌年はその畑にオユーコ（Olluco）やオカ（Oca）というイモが作られ、3 年目にはソラマメ、4 年目にオオムギのように輪作される。5 年目からその畑は休閑され、農民が飼っているウシ、ウマなどの家畜の放牧地にされる。ライメのほとんどは灌漑がなく、天水農耕が行われる。

コムニダの文字通りの意味は「共同体」だが、ここでは耕地の種類を意味し、灌漑が施されトウモロコシが連作されている耕地である。だいたい標高 3600 メートルより下に位置する。コムニダは、家畜の侵入を防ぐため、石垣で囲まれており、全員がほぼ同時期に種蒔きと収穫を行い、収穫後は石垣が崩され、家畜の糞による施肥を行う目的で、刈り後に家畜が放牧される。このコムニダの上限がトウモロコシ栽培の上限でもある。

プイカ村（中心の村、標高 3600 メートル）はちょうどライメとコムニダの境界地点に位置する。そして、その周辺の峡谷の斜面の階段畑を利用して、多様な作物が栽培されている。ただし、川の源流部から下流までの標高差 3000 メートル以上を利用するマルカパタなどと違う点は、基本的には高度差の利用は村付近の峡谷の谷底（標高約 3400 メートル）から V 字谷斜面の農耕上限までの利用であり、その標高差は 500 メートルほどに限定されている。プイカの上流にはスニ村（プイカ行政区に属す）があり、下流には別のベトヘ村（これもプイカ行政区に属す）があつて、それぞれの住民の畑があるからである。また、川を北に遡った上流部にあるワフタパ、チュルカとチンカイリヤパの 2 村は、谷底がトウモロコシの上限より上で、トウモロコシ畑をほとんど持たない。そのため、これらの集落の農民たちは、スニとマフワンハのウモロコシ畑（コムニダ）に飛び地の耕地を持っており、トウモロコシの自給を確保している。一方で、最上流部のチュルカとチンカイリヤパの農民の一部は、村の上のプーナ（高原）でわずかながらリヤマ、アルパカの放牧も補完的に行っている。これらの村々の場合は川の上流から

中流までを利用している点では、東斜面の小型版（下流は利用しない）というようなタイプの高度差利用といえる。

このように、峡谷に住む農民は、高度差を利用して、最も重要な作物であるジャガイモとトウモロコシを自給しているが、その高度差利用の形態には、垂直的なもの（峡谷の斜面の利用に限定されているタイプ）と水平的なもの（川下の飛び地の利用、東斜面の小型版のタイプ）とがある。また、峡谷の最上流部では、農民の一部が補完的な牧畜も行い、峡谷に近い高原に住む牧民の一部は峡谷に飛び地を持ち補完的農耕も行っている。このように、一つの谷をとってもミクロな高度差利用の形態は多様である。

中央アンデス西部高地における專業牧畜

プイカのプーナに居住する牧民の多くは專業のリヤマ・アルパカ牧民である。アンデスのラクダ科動物には、野生種もビクーニャとグアナコの2種類がある。リヤマは野生種も含めたラクダ科動物のなかで最大で、体高（肩までの高さ）は1メートル前後である。リヤマは主に荷役用の家畜で、一人前のリヤマは、1キントル（46キロ）程度までの荷を背負って、1日20キロほど歩くことができる。荷物を運搬するためのキャラバンは、普通10数頭から数10頭で編成される。アルパカはリヤマより小型であるが、毛の強さ、保温性、肌ざわりなどがリヤマより優り、毛の生産がその主な用途である。アルパカ毛は農民から農産物を手に入れるための物々交換の重要品目であった。しかし、アルパカ毛が海外にも輸出されるようになり価格が上がったため、1960年代からは現金化されるようになった。アンデス高原では11月から4月にかけての雨季には雪や雹が降ることが多いが、日中は比較的暖かく草原は豊かになり家畜が太る。アルパカの毛刈りはこの時期に行われる。

アンデスの牧畜の用途は以上のように、運搬と毛の生産に特化されており、その最大の特徴は搾乳が行われず、乳は全く利用されないことであろう。その他、肉は食用になり、皮は皮紐にされ屋根材の固定などに利用される。糞はプーナでは重要な燃料とされ、また肥料として農民との物々交換にも用いられる。

牧民たちは家畜の群を、アルパカとリヤマとに

分け、またそれぞれを、タネ雄と母家畜とその仔による群、去勢雄だけの群の2群に分けている。タネ雄は数10頭の雌につき1頭の割合である^{注1)}。タネ雄以外の雄は黒耀石のナイフで睪丸の袋を切り、睪丸を切除する方法によって去勢される。

アンデス牧民が全く乳を利用しないと述べた。家畜の肉は重要なタンパク源ではあるが、祭りのとき以外はそれほど屠殺されない。したがって、牧民の主食も、農民と同じくジャガイモ、トウモロコシを中心とする農産物である。牧民がそれらの農産物を獲得する伝統的な方法は、次の2種類である。第一は、峡谷の農村にリヤマのキャラバンを率いて下りていき、段々畑から農民の家まで収穫物をリヤマの背に載せて運び、その一部を報酬として受け取るというもの、第二は物々交換である。彼らは肉、干し肉、畜糞、岩塩、果実、土器などの交易品を農産物と交換する。乾季の初めの4月から6月にかけては、農村でジャガイモやトウモロコシが収穫されるが、この時期以後、牧民は農産物を確保するため、リヤマ連ねて活発に峡谷部に赴くのである。牧民たちはこれらの方法によって、一年に必要な農産物のほとんどを獲得してしまう。

収穫期から雨期のはじまりの12月初旬までに、農村でカトリック聖人の祭が行われる。祭はスペイン起源のカトリック聖人の祭がアンデス社会に適応して、独特の発達をとげたものである。収穫期にあたるサンタ・クルスの祭りなどは収穫祭的な要素をもっている。

雨季になるとリヤマのキャラバンはあまり行われなくなる。12月からは家畜が出産するため、雨季には幼畜が小川や湿原にはまったり、キツネやコンドルに襲われたりすることのないよう気を配らなければならない。雨季の2月から3月のカルナバル（カーニバル）の頃には、家畜の増殖と成長を祈る儀礼が行われる。儀礼は、家畜の本来の持ち主であり保護者であるとされる山の精霊と、水と草を与えてくれる大地の女神パチャママに対して行われるものである。

高原のなだらかな氷食谷の斜面には所々に湧水沢が形成され、川に注いでいる。そのような場所には湿原が形成され、アルパカの放牧に適している。谷からはずれた広い高原（氷食谷より200メートルほど高い）は、乾燥し荒れ地も多いが、場所

によってはイチユという先が尖った細い草が多く、リヤマはこれを好んで食べる。

牧民の家族は父系的な「大家族」を成し、それが一定の領域（平均で20平方キロ程度の広さ）を占有している。プイカでは、ひとつの「家族」は平均でおよそ300頭、最高で2000頭ほどのラクダ科家畜を飼養されている。家畜の4分の3ほどはアルパカで残りがリヤマである。

牧民のエスタンシア（居住地と放牧地）は、隣の住民との間で暗黙の了解による境界がもうけられている。その境界は、川や尾根や目立つ岩など自然の標識によって認識されている。平均の広さはだいたい20平方キロである。牧民はその比較的狭い領域内に、二つ以上の住居をもち、その間で季節的な移動が行われている。しかし、領域内での移動に過ぎず、「移牧」とはいえないものである。交易を目的とするリヤマのキャラバンによる長距離の移動はあるが、アルパカの放牧を目的とする上下の移動はない。

筆者は標高4500メートルのあるスタンシアの住居と放牧地の領域の実測をおこない、家畜の移動の形態を調査した。そこのハトゥン・ワシ（主住居）は、泉が湧く沢に位置し、住居と倉庫の8棟から成っている。一方アスタナ（副住居）は、水はけの良いならかな台地上にある。住居は一棟だけで、その周囲にいくつもの家畜囲いがあるのが特徴である。この二つの住居の間で全家畜と家族成員の一部の移動が行われる^{注2)}。

しかし、季節的移動はその領域内に限定され、二つの住居の間の直線距離は1キロ余りに過ぎない。どちらにしたところで、放牧地は住居から日帰り放牧ができる場所にある。つまり、移動というよりは、「夜間家畜を集める場所を変える」という表現の方がぴったりする。標高差はほとんどなく、「上下移動」とも言えない。

5月から10月にかけての乾季には、草地のローテーションのため、およそ1ヶ月毎に二つの住居の間での移動が行われる。この時期には家畜は夜間、ワランと呼ばれる大きな囲いで寝る。11月から4月頃までの雨季（夏にあたるが、高原では雪が降ることが多い）には、家畜は夜副住居の囲いに集められる。雨季は家畜の出産期に当たるため、幼い仔家畜がいる。それらをキツネやコンドルから守るため、家畜は夜間きちんと閉鎖した囲

いに集められる。副住居は水はけのよい場所にあるが、それでも、雪や雨が降ると、囲いの地面は家畜の糞と混ざって泥まみれになるため、4つある囲いの間でローテーションが行われる。

このように、中央アンデスにおける家畜の移動は、「草地のローテーション」も目的ではあるが、むしろ「雨季に水捌けのよい家畜囲いを確保すること」がより一層重要な目的になっている。ラクダ科動物は同じ場所に糞をする性質をもっている。そのため、雨季には家畜囲いの地面が家畜の糞と一緒に泥まみれになり、伝染病の病原菌で汚染しやすい。雨季が家畜の出産期と重なることから、新生家畜の病気による死亡率が高くなりやすい。それを抑えるために、より良いコンディションの家畜囲いを確保することが重要なのである。そのため、副住居にはたくさんの家畜囲いが必要なのである。放牧の領域は家族ごとに決まっており、その範囲内での放牧であれば、どちらの居住地からでも日帰り放牧ができる距離にある。つまり、「草地のローテーション」のためだけなら、複数の住居間の季節的移動は不可欠なことではない。

したがって、アンデスの牧畜は領域内でのミクロな移動はあるものの「定牧」すなわち定住的な牧畜といえる。

牧畜から見たヒマラヤ・チベットとアンデス トランスヒューマンス、移牧、移農

「トランスヒューマンス」という用語は、元々はピレネーやアルプスなどに固有な牧畜形態を指すことばであった¹¹⁾。しかし、この語は家畜や人びとの移動を表すのにかなり安易に使われてきた。

アンデス研究においても、かなりの研究者が、アンデスの牧畜でトランスヒューマンスが行われていると述べている。それらの事例のうち、ある地域ではヒマラヤと同じく雨季（夏にあたる）に家畜を高地に移動するとし¹²⁾、別の地域では乾季（冬）に高地に上げるとしている¹³⁾。これらの研究には具体的な事例が示されていない。このことは、上下の家畜移動はおそらくミクロな移動であり、標高差はあまり意味がないことを暗示している。また、ウェブスターは、ケロの事例において、移動が農耕サイクルに合わせたものだとして明確に述

べているが、それをトランスヒューマンスと呼んでいる^{9,14)}。

このように、アンデスの牧畜に関してトランスヒューマンスという概念が使われ、それが「移牧」と誤って捉えられかねない。ここで、牧畜と農耕に関わる移動について、下記のように定義しておきたい。

- ①移牧 (pastoral transhumance)：山岳地域で異なる生態系を利用して家畜を放牧するための上下の季節移動。
- ②移農 (agricultural transhumance)：山岳地域において多様な作物を栽培するための上下の季節移動。

筆者は以前の論稿で、山岳地域における移牧を mobile pastoralism、移農を mobile agriculture として、論じたことがある。

しかし、遊牧 (nomadism) と区別して、移牧を pastoral transhumance とし、両者を包括する概念として移動牧畜 (mobile pastoralism) としたほうがよいと考えている。ただし、移牧と遊牧とは排他的なものではなく、連続的なものである。チベットの遊牧にも上下の季節移動の要素があることが、スタンらによって指摘されている。遊牧はモンゴルなどで典型的にみられる平坦な草原における不規則な移動とされるが、モンゴルにおいても、北部のフブスグル県、西部のバヤンウルギー県など山がちな地域では、上下の移動の要素があり、一般に標高が高いところでは移動も規則的になる傾向がある。

また、同じく、焼畑の場合のような集落ごと移動する農耕 (shifting cultivation) とも区別して、本拠地の住居は固定しており、出づくり小屋的な一時的住居を利用して上下に移動するような、山岳地域の上下移動を伴う農耕は、移農 (agricultural transhumance) としたほうが適切である。

なお、定住的な牧畜を「定牧」、移動しない農耕を「定農」としておく。

ヒマラヤのトランスヒューマンス

ジュンベシ＝バサ谷では、耕地はほぼ標高 3000 メートル以下に限られており、そこでの移牧は純粋な家畜の移動である。牧者たちは定住村落の周

辺に耕地をもっており、世帯としては農耕にも従事している。しかし、世帯の一部成員が（または一時的に世帯全員が、村の家を留守にして）、家畜の世話のために一旦村を離れる。そこからは純粋な牧畜活動となり、農耕の要素はない。クンプ地域やロールワリン地方の「高地シェルパ」の場合は、それとは大きく異なる。

クンプ地域のハジュン（標高 4200 メートル）の 1974 年のデータによると、月平均気温の最高は 6.2 度（7、8 月）で最低は - 8.2 度（1 月）であった。冬期の低温と積雪は高地での放牧を困難にする。しかし、冬に高地に家畜を上げるという自然のサイクルに抗するような移動の事例が鹿野勝彦によって紹介された。同様に、ブロウワーも「クンプのヤクは、冬に高地で放牧されることから除外されないため、1 年のいかなる時期でも最高所での放牧がみられる」¹⁵⁾ と指摘し、タメ地方における 3 回の上下移動のサイクルの事例を紹介している。

このヒマラヤのトランスヒューマンスと自然周期との関係はどのように捕えるべきだろう。鹿野勝彦「従来は牧畜にかかわる移動のみが重視されてきた傾向があるが、ヒマラヤにおいては農業と牧畜は、世帯レベルにおいて不可分の生業として統一されている場合が少なくない。その場合、農業においても高度の異なる複数の地点に耕地をもち、人々がその間を移動しながら耕作を行う例もしばしばみられる」²⁾ と指摘した。クンプ地域など「高地シェルパ」社会においては、確かに、トランスヒューマンスは農・牧の両要素が密接に連動している。そのため、「高地シェルパ」では、冬に雪の中で家畜を高地に上げるというような不自然な動きをする。

このような違いの由来については、「高地シェルパ」はソル地域のシェルパより遅れて現在の地に移住したとされており、その点にひとつの理由があると思われる。つまり、最初にソルの地に移住してきたシェルパの祖先はそこで豊かな農耕に適した谷を手に入れることができた。一方「高地シェルパ」は、豊かな谷を他民族集団や先行のシェルパに押えられてしまっていたため、農耕にはあまり適さない「高地」を本拠地にして、異なる標高に分散した耕地を利用しなければならなかった。それは、農耕のための労働時期の分散と危険

の分散および、家畜飼養のキャパシティーの極大化（草の最大限の利用）のために機能させるという側面もある。

ソル地域と「高地シェルパ」における農耕と牧畜に関する移動形態を比較すると、ソルの場合は「移牧定農」であるのに対し、「高地シェルパ」の場合は「移牧移農」と呼ぶことができる。

ソルではまた、シェルパ族のヤクとゾムのトランスヒューマンスに、南の低地のオカルドゥンガ地方のグルン族のヒツジ牧畜のトランスヒューマンスが重なりあう。かれらの出身地においては、農耕と関係しているが、牧者たちはほぼ1年を通して移動しており、その生業形態としては専業牧畜の要素が強い。

鹿野勝彦は、ヒマラヤ南面高地のトランスヒューマンスについて2つのタイプを設定している²⁾。そのひとつは、ソルクンプ地方にみられるような、「ヤク、牛及びその雑種を主要な家畜とし、高地の限られた地域内で農業と統合的に経営されるタイプ」で、もうひとつは、ネパール西部からインド、パキスタン北部にかけての、「羊、ヤギを主要な家畜とし、移牧の過程で、より低地の、他の地域・民族集団の地域を通過・滞在し、高地に生活の本拠をおきながらしばしば亜熱帯平原までも移動の範囲に含み、専門的ないし交易と統合的に行われるタイプ」である。ソルにやってくるグルン族の牧者は、この後者のタイプのバリエーションのひとつとすることができるだろう。本拠地の位置が異なり、「低地の本拠地から、高地の他民族の地域に移動する」という点では違いがある。

本稿では、ソル地域とクンプ地域（高地シェルパ）の異なるパターンを区別し、「移牧定農」「移牧移農」とする。グルンや西ヒマラヤの専業牧畜の場合は、これを純粋な「移牧」と呼ぶことができる。

アンデスの定住的牧畜と移動する農耕

先に、ヒマラヤにおけるトランスヒューマンスを3タイプに分けたが、いずれも牧畜要素に関してはいずれも「移牧」である。一方、中央アンデスにおいては定住的な牧畜が成立している。しかし、アンデスでも、東斜面と西部高地では異なるタイプがみられる。

中央アンデスでは、おおよそ4000メートルの境に、生態系として「プーナ」（高原）とケブラーダ（峡谷）にわかれ、それが概ね牧畜地域と農耕地域とに対応している。筆者が調査をおこなったペルー南西部プイカ地区では、高原と峡谷は乾燥した不毛地帯によって明確に隔てられて、その生態系の区分に応じて牧民社会と農民社会とが社会的に明確に区分されている。つまり、牧畜に関しては「定牧」といえるものである。一方、アンデス東斜面のように湿潤な地域では農耕地域と牧畜地域が一部オーバーラップしており、住民たちは川の上流から下流までを利用し、農牧複合を行なっている。

標高差によって「区分」されるアンデスの高原と峡谷という異なる生態系は、区分されているけれども「近接」しているのが特徴である。その「区分」と「近接性」というふたつの面のうち、東斜面の湿潤性は環境の連続性を生み出し「近接性」を強く作用させ、マルカパタのような農牧複合を成立させている。逆に西部高地の乾燥性は「区分」をより作用させ、それによってプイカのような「専業牧畜型」を成立させているわけである。

熱帯の高地であるアンデスは、一年の気温変化がほとんどなく、また高原には雪解け水の湧水による湿地が一年にわたって維持される。そのような「生態系の安定」は、「定牧」（定住的牧畜）の成立を可能にした。そして「リャマの輸送力」が、東斜面の農牧複合においては農耕サイクルに合わせた移動と農作物の輸送を容易にした。

アンデスではまた、「リャマの輸送力」とともに「アルパカ毛の生産」も専業牧民と農民との経済的関係を強める役割を果たした。「近接性」と牧畜の「定住性」によって、農民と牧民の間の住み分けがうまく成りたつとともに、牧民は農民との安定した互恵的關係が維持されてきた。両者の関係は単に経済的關係にとどまらず、擬制親族関係、祭りの共同主催など、さまざまな社会的関係を取り結んでいる^{10,16)}。こうした現在の民族誌的知見から、アンデスで「乳利用」の必要性が生まれなかったことが想像できる。

一方、熱帯高地という環境が、標高差によって比較的狭い範囲で多様な作物の生産ゾーンを形成している。農民は多様な作物を栽培するため、頻

繁に上下移動することになる。つまり、熱帯高地の環境が農民に高度差の利用を促し、「農耕の移動性」を生み出しているのである。アンデス東斜面における農牧複合の形態は、移動の形態から見ると「定牧移農」と言うことができる。

高地適応型牧畜と移動の形態

以上述べてきたように、ヒマラヤでは、牧畜における高度差利用として「移牧」すなわち上下の季節移動が行なわれるが、中央アンデスではむしろ、牧畜は「定牧」であり、東斜面の農牧複合の場合でも牧畜は移動しない「定牧」であり、農耕の方が「移農」すなわち移動性と結びついている。このようなヒマラヤとアンデスの違いはどのような生態学的条件によるのであろうか。

北緯 27 度以上のヒマラヤ高地では季節による気温の差が大きいが、南緯 10 数度という「熱帯」に位置する中央アンデスの高原では気温の日変化は大きい、平均気温の年変化がたいへん小さい。また、乾季には雨量が少ないが一年を通じて氷河の湧水があるため高原の湿原が各所に形成されており、そこでは一年中アルパカの放牧に適した植生が維持される。高地の強烈な日射はイネ科の植

物の生長を促す。つまり、熱帯高地の環境は、寒地適応型の動物にとっては、むしろ一年を通じ比較的安定した豊かな環境だといえるのである。そのため、年間を通じてアルパカとリヤマを標高 4000 メートル以上の高地で飼うことが可能であり、一定の領域内で維持できるのである。

アルパカの野生祖先種が現生野生種のビクーニャであることが J. フィーラー¹⁷⁾ や川本芳^{18,19)} の遺伝学的研究によって示唆された。ビクーニャの「家族群」は 1 頭のボスの雄と数頭の雌およびその幼獣から構成され、一年中固定したテリトリーに生息する²⁰⁻²²⁾。したがって、アルパカ牧畜の定住性は野生原種の生態にも一致することになる。なお、ビクーニャはインカ時代に生きたまま捕獲し、毛を刈って解放する「チャク」と呼ばれる習慣があった。チャクはスペインによる征服後に消滅したが、その習慣が 1993 年からブルーで新しい技術を用いて復活した^{注 3)}。

図 2 は上のアンデスとヒマラヤの比較にチベットを加えて整理したものである。上の 3 タイプは専業の牧畜である。一番上の「遊牧」はチベット高原にみられるものだが、チベットの遊牧には上下移動の要素も含まれている。次はヒマラヤ西部

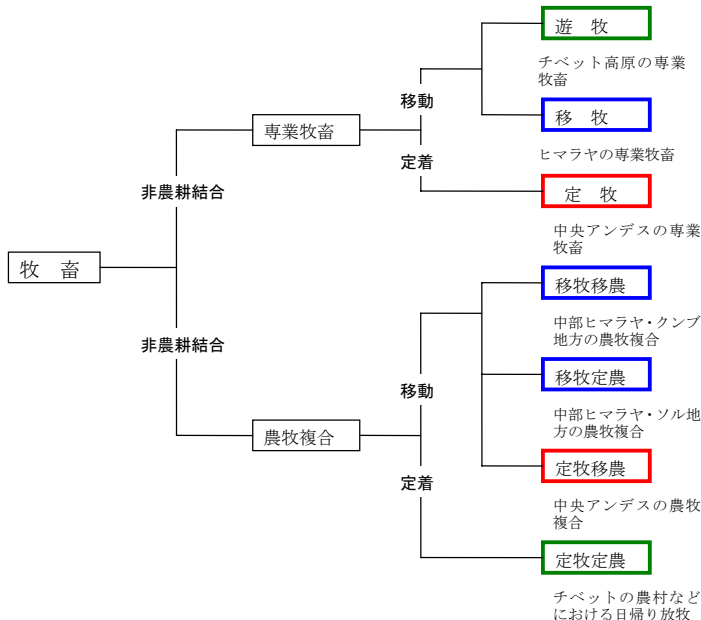


図2 低緯度高地における、移動・定着を基準にした、農牧複合を含む牧畜の分類。

で一般的な「移牧」で、移動の距離や高度差が大規模である。チベットの谷源頭部でも「移牧」の形態をとるが、移動の規模は比較的小さい。3番目がアンデス西部高原でみられる「定牧」である。次に農牧複合の4タイプをあげている。一番上が「高地シェルパ」でみられる「移牧移農」、次がソル地域でみられる「移牧定農」であるが、このタイプはチベットの谷上流部の半農半牧村でもみられる。3番目がアンデス東斜面独特の「定牧移農」、一番下がチベットの農村で日帰り放牧がおこなわれるタイプの「定牧定農」であるが、これは農牧複合といえるものから、農耕が中心でわずかに補完的な家畜飼養が行なわれているケースまで多様であろう。これはアンデスやヒマラヤの農村でも一般的に見られる。

おわりに

本稿では、低緯度高地における高度差利用と移動に着目し、主として牧畜の観点から類型化を行なった。類型自体は、牧畜の多様な側面を明らかにするものではないが、高地における牧畜への環境の影響を検討するためには有効であり、特に、アンデスとヒマラヤ・チベット両地域を視野に入れることによって、論理的に可能なすべてのタイプが網羅できることは興味深い。

本稿では詳しく述べなかったが、アンデスとヒマラヤでは民族構成が大きく異なる。アンデスの場合は最後のインカ文明の時代に広範囲に統一されたため、（アイマラが占める）チチカカ湖周辺などの南部を除き、ケチュアが高地の広い範囲を占めている。一方のヒマラヤでは山岳地域に多くの民族が居住し、本稿で扱ったシェルパは最も標高の高い地域を占めるに過ぎない。それが高度差利用の形態にも関係している。

地形については、アンデスの方が比較的単純であり、ヒマラヤは起伏が激しい。それがヒマラヤの統一を阻み、多民族性が維持された要因でもあろう。アンデスの場合は、高原が比較的移動しやすく、古代文明におけるアンデスの広い範囲の統一に利するところがあったと思われる。一方で、アンデスの場合は、16世紀にスペインによる征服とそれに続く植民地化を経て、先住民の支配と主流社会のスペイン化によって社会全体は大きく変化した。また、現代における近代化、市場経済

の浸透、観光などの影響で、二つの地域は再び大きく変化しつつある。

社会の成り立ちも二つの地域で大きな違いがある。ヒマラヤの場合は父系出自が重要な社会的機能を果たしているが、アンデスの場合は双系であり、親族は大きな役割を果たしていない。むしろ地縁的な組織が重要である。父系出自では、出自集団が村を構成し、外婚（同一の出自集団内での結婚を禁じる制度）によって多村から嫁を迎えることになる。一方アンデスの場合は地域の内婚が多い（ただし、牧民と農民の結婚も多い）。近代化による変化を比較するときには、そうした家族、親族、婚姻制度などを考慮することも必要であろう。

本稿では、環境への適応、とくに高度差利用に焦点を当てたため、伝統的なシステムに着目し、時間軸、すなわち、古代文明、歴史、現代的な変化などの側面は取り上げなかった。それらについては、今後の課題とし、別稿で論じたい。

注

- 1) 野生種のビクーニャは、ふつう、リーダー雄1頭につき5、6頭の雌と幼獣によって「家族群」を成し、固定した生息域をもつ。したがって、家畜の群の構成は、タネ雄1頭あたりの雌の数が野生より多い。
- 2) 実測地図と移動の詳細については稲村¹⁰⁾を参照されたい。
- 3) ビクーニャの毛の質は極めて高く、インカ時代には数万の民を集めて「チャク」と呼ばれる追い込み猟が行なわれ、毛はインカ皇帝に献上された。チャクの復活は先住民社会に大きな変化をもたらしている。また、野生動物を管理・保護する「殺さない狩猟」であるチャクの存在は狩猟・牧畜論に大きな学術的な意味を持つ。チャクの復活の経緯とその意義については稲村²³⁻²⁵⁾を参照されたい。

文献

- 1) 山本紀夫・岩田修二・重田眞義 (1996)「熱帯高地とは一人間の生活領域としての視点から—」『熱帯研究』5 卷3/4 号
- 2) 山本紀夫・稲村哲也 (編著) (2000)『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界—』八坂書房
- 3) 鹿野勝彦 (1978)「ヒマラヤ高地における移牧—高地シェルパの例をととして—」『民族学研究』43 卷 1 号 :85-97
- 4) 鹿野勝彦 (1979)「ロールワリン・シェルパの経済と社会」『リトルワールド研究報告』3 号 : 1-42
- 5) 稲村哲也 (1996)「中国内蒙古自治区における環境と人口 調査報告」『リトルワールド研究報告』13: 57-99
- 6) Ekvall, Robert B. (1983) *Fields on the hoof: Nexus of Tibetan nomadic pastoralism*. Waveland Press, Illinois.
- 7) スタン, R.A. (1993) (山口瑞鳳訳)『チベットの文化 決定版』岩波書店
- 8) Nuñez del Prado C., Oscar (1983) Una cultura como respuesta de adaptacion al medio ambiente. In Flores Ochoa., J. A. & J. Nuñez del Prado Bejar (ed.) *Q'ero: el Ultimo allu inka*. pp.14-29. Centro de Estudios Andinos, Cuzco.
- 9) Webster, Steven (1973) "Native pastoralism in the Andes." *Ethnology* 12(2):115-133.
- 10) 稲村哲也 (1995)『リャマとアルパカー—アンデスの先住民社会と牧畜文化』花伝社
- 11) Khazanov, A. M. (1984) *Nomads and the Outside World*. Julia Crookenden (tr.), Cambridge University Press. Cambridge.
- 12) Camino, A. (1982) Tiempo y Espacio en la Estrategia de Subsistencia Andina: un Caso de las Vertientes Orientales Sud-peruanas. In Millones, L. & T. Tomoeda (eds.), *El Hombre y su Ambiente en los Andes Centrales*. Senri Ethnological Studies 10: 11-38.
- 13) Orlove, B. (1977) *Alpaca, Sheep and Men: the Wool Export Economy and Regional Society in Southern Peru*. Academic Press, New York., p84.
- 14) Webster, Steven (1983) El pastoreo en Q'ero In *Q'ero el Ultimo Ayllu Inka*, Jorge A. Flores Ochoa and Juan Núñez del Prado (eds.), Centro de Estudios Andinos, Cuzco, pp.48-81.
- 15) Brower, B. (1991) *Sherpa of Khumbu: People, Livestock and Landscape*. Oxford University Press. p126.
- 16) Inamura (1986) Relaciones estructurales entre pastores y agricultores de un distrito altoandino en el sur del Perú. In *Etnografia e etnohistoria del mundo andino: continuidad y cambio*. Shozo Masuda (ed.), Universidad de Tokio, pp.141-190.
- 17) Wheeler, J. C. (1988) Nuevas evidencias arqueológicas acerca de la domesticación de la alpaca, la llama y el desarrollo de la ganadería autóctona. In *Llamichos y Pacocheros: Pastores de Llamas y Alpacas*: 37-43. Jorge A. Flores Ochoa (ed.) Centro de Estudios Andinos, Cuzco
- 18) Kawamoto, Yoshi, et al. (2004) A preliminary study on blood protein variations of wild and domestic camelids in Peru. *Report of the Society for Researches on Native Livestock* 21:297-304.
- 19) Kawamoto, Yoshi, et al. (2005) Genetic Differentiation among Andean Camelid Populations Measured by Blood Protein Markers. *Report of the Society for Researches on Native Livestock*, 22:41-51.
- 20) Pérez Ruiz, W. (1994) La Saga de la Vicuña. Diálogo s.a., Lima, p42.
- 21) 大山修一 (2004)「南米アンデスの高貴な動物—ビクーニャと人びとの暮らし」『地理』49-9 : 100-106
- 22) 大山修一 (2007)「ジャガイモと糞との不思議な関係」山本紀夫 (編)『アンデス高地』135-154 頁
- 23) 稲村哲也 (2007b)「野生動物ビクーニャの捕獲と毛刈り—インカの追い込み罠『チャク』とその復活」、山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会、279-296 頁
- 24) 稲村哲也 (2007c)「アンデス発の牧畜起源論」、山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会、297-310 頁
- 25) 稲村哲也・川本芳 (2005)「アンデスのラクダ科動物とその利用に関する学際的研究—文化人類学と遺伝学の共同—」『国立民族学博物館調査報告』55 :119-174

- 26) 稲村哲也（2000）「アンデス山脈とヒマラヤ・チベット山塊」『地域の世界史4—生態の地域史—』川田順造、大貫良夫編、山川出版、214-267 頁
- 27) 稲村哲也（2004）「牧畜からみた山の文化—中央アンデスをヒマラヤと比較して」『山の世界』梅棹忠夫、山本紀夫編、岩波書店、225-236 頁
- 28) 稲村哲也（2007a）「旧大陸の常識をくつがえすアンデス牧畜の特色」、山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会、259-277 頁
- 29) 岩田修二（1998）「アンデスの自然環境—人間活動の舞台として—」『地理』43 巻7 月号（通巻512 号）：38-49
- 30) Rick, John W. (1988) Identificando el sedentarismo pre-histórico en los cazadores recolectores: un ejemplo de la sierra sur del Perú. In *Llamichos y Pacocheros: Pastores de Llamas y Alpacas*, Jorge A. Flores Ochoa (ed.), Centro de Estudios Andinos, Cuzco, pp.37-43.
- 31) 山本紀夫（1992）『インカの末裔たち』NHK ブックス650、日本放送出版協会
- 32) 山本紀夫（2004）『ジャガイモとインカ帝国』東京大学出版会
- 33) 山本紀夫（編）（2007）『アンデス高地』京都大学学術出版会